

日本語の助動詞類と文構造

塚脇 幸代

s-tsuka[at]dream.ocn.ne.jp

0. はじめに

日本語において「助動詞」なる範疇を規定しようとするとき、英語の「助動詞」から想起される単位を考えることも一つの方法である。しかしながら、英語と対比される日本語の助動詞は、形態的に種々の様相を見せる。のみならず、そもそも日本語と英語とは語順の相違があり、英語の助動詞が動詞類の前に置かれるのに対し、日本語では後ろにおかれる。また、英語の助動詞は主語との転倒によって疑問文を作ることがあるが、日本語ではこれに相当する文法現象がなく、助動詞の判定方法として用いることができない。そこで本稿では以下に示す3つの条件を満たす要素を日本語における「助動詞類(AUX)」とみなし、その形態的な特徴と他要素、主に前接要素との接続状況、さらに文構造との関係について観察、及び考察を行う。¹

条件1 単文(S)の中心的内容語(N,A,Vのいずれか)から文末(EOS)または従属接続詞(CNJS)の直前までに現れる。

条件2 活用をもつ。

条件3 前接要素を必須とする。

1. 助動詞類のタイプと接続

1.1 単一の形態素からなる助動詞類

第一類: れる/られる、せる/させる、た、たい、よう、ない、だ、です、ます等、伝統的な助動詞。

前接要素に動詞類(V)、形容詞類(A)、名詞類(N)を想定した際の、接続の可否を表1に示す。表中の“1”は接続が可能であることを、“0”は接続が不可能であることを表す。

	V	A	N
(よ)う	1	1	0
べし	1	1	0
ない	1	1	0
た	1	1	0
なり	1	1	1
らしい	1	1	1
れる/られる	1	0	0
せる/させる	1	0	0
たい	1	0	0
ます	1	0	0
です	0	1	1
だ	0	0	1
たり	0	0	1

表1 単一形態素助動詞類(第一類)の前接要素

留意すべきは動詞類(V)・形容詞類(A)のみならず名詞類(N)が前接する助動詞類(AUX)の

¹ 本稿で用いているN、A、Vなどで示される品詞分類は参考文献3に基づいている。

存在である。らしいは「太郎は猫を飼うらしい」(Vが前接)、「太郎の猫は美しいらしい」(Aが前接)、「太郎が飼っているのは猫らしい」(Nが前接)のように用いられる。

前接要素にVもAもとらないが、Nは前接可能というのがたゞである。ですも同様の傾向を見せるが、こちらはAの前接を許容する。(ex.「薔薇は美しいです」)

第二類：できる、続ける、始める、終わる等、同形の内容語(V,A)を持つ助動詞類(AUX)

	V	A	N
すぎる	1	1	0
かねる	1	0	0
続ける	1	0	0
始める	1	0	0
終わる	1	0	0
やすい	1	0	0
にくい	1	0	0
がたい	1	0	0
つらい	1	0	0
出す	1	0	0
できる	0	0	1

表2 単一形態素助動詞類(第二類)の前接要素

これらの助動詞類は単独で動詞類や形容詞類としても現れるものが多い。かねるは否定の意を含む複合動詞の要素、にくい、がたいについては複合形容詞の要素と捉えることもできるが、造語性の高さから、助動詞類とみなすことにより、解析精度への貢献が期待できる。できるに前接可能なNは、VN(サ変動詞語幹)に限られる。

1.2 複数の形態素からなる助動詞類

2つ以上の形態素からなる助動詞類。

第三類：先頭の要素が機能語である機能語先行型の助動詞類

	V	A	N
そう(だ)	1	1	0
よう(だ)	1	1	0
かもしれない	1	1	1
やもしれない	1	1	1
に過ぎない	1	1	1
みたいだ	1	1	1
つつある	1	0	0
ている/ある/おく/いただく/ 差し上げる)	1	0	0
ねばならない	1	0	0
なければならない	1	0	0
である	0	0	1

表3 複数形態素助動詞類(第三類)の前接要素

多様な形態素によって構成される。そうだ、ようだなどは、それぞれ「そう」「よう」に「だ」が後接した構造と考えられる。「だ」は「である」と交替可能で、「そうな」「ような」「そうである」「ようである」と形

をえることができる。ここに分類される助動詞類はおおむね形態的な多義性をもたないが、「て」を第一要素として「いる」「ある」「おく」「いただく」など、動詞形の要素が後接するものは、一意であるとは言い切れない。であるについても同様、これらを一つの形態素と認める際には慎重を期す必要がある。

第四類：先頭の要素が名詞または形式名詞である内容語先行型の助動詞類。

	V	A	N
つもりだ	1	1	0
はずだ	1	1	0
気配だ	1	1	0
様子だ	1	1	0
傾向がある	1	1	0
傾向にある	1	1	0
ところだ	1	1	0
ことがある	1	1	0
場合がある	1	1	0
ことだ	1	1	0
わけだ	1	1	0
わけがない	1	1	0
次第だ	1	1	1

表4 複数形態素助動詞類(第四類)の前接要素

このうち気配だ、様子だ、傾向がある、傾向にあるなどは、形容詞類(A)が前接すると第一要素の名詞性が強くなる。次第だの名詞類を前接要素に持つ場合は、動詞類、形容詞類が前接した場合と意味が異なる。

2. 助動詞類の多義性

第二類の助動詞類に見られるような内容語との多義性のほかに、助動詞類同士の多義性も存在する。

第三類の助動詞類 そうだの例を以下に示す。

(1)太郎は猫を飼うそうだ。

(2)太郎は猫を飼いそうだ。

(1)は伝聞、(2)は様相の意である。この違いは、前接する動詞の活用形によって決めることができる。前者は終止/連体形、後者は連用形である。他方、第四類のところだについてはどうであろうか。

(3)太郎は仕事に行くところだ。

(4)太郎は仕事がほしいところだ

(5)フランスは、太郎が仕事で行くところだ。

(6)そのベンチは太郎が座るところだ。

(3)は「太郎＝ところ(場所)」の解釈が排除され、「ところ」＝動作の開始または動作の途中と解釈される。

(4)の「ところ」は、動作の途中または第三者の観察結果を表す。(5)は文字通り「ところ」＝場所をあらわす他に、(3)と同様、動作の開始や途中との解釈を許す。(6)にいたっては「ところ」＝場所が有力な解釈となり、助動詞類ではなくなるが、それでもなお、(3)と同様の意味に取るべき可能性を捨てきれない。

このような多義性は、個々の助動詞類によって事情を異にする。よって、多義性の解消においても個別の対応が必要となる。

3. 助動詞類と文構造

格構造の変換をもたらす要素として、れる/られる、せる/させる、はよく知られている。「(が) できる」も独自の格構造を持っている。このように、本稿の冒頭で示した条件1の範囲は、日本語の文構造を決定する要素があらわれる位置でもある。

第一類に分類しただけについてみると、先述したように動詞類にも形容詞類にも接続せず、名詞類にのみ接続する。「トマトは野菜だ」のような、いわゆる名詞文を形成する要素である。この場合、文構造を決定しているのは「トマト」でも「野菜」でもなく、助動詞類「だ」である。

また、第四類の、内容語先行型の助動詞類で、「名詞(N)+が+ある」(ことがある、場合がある、傾向がある)の構成をもつものは、「ある」に支配された文構造を持っている。その支配力は、前接する動詞類の持つ格構造より強力であると仮定される。とすれば、このような構成をもつ助動詞類は、構成される個々の形態素を残しつつ構文解析されるのが妥当である。

(7)太郎は散歩に行くことがある

(7)'[太郎_iは[[太郎_iが散歩に行く]_sこと]_{comp}がある]_s

ただし、常に(7)'の解析を行う前提として、形式名詞「こと」の曖昧性の解消の方法を確立する必要がある。

4. 助動詞類の範疇について

本稿で取り上げた第一類、第三類の助動詞類に関しては、伝統的な助動詞と重なる部分が多く、助動詞類として扱うことにさして抵抗はない。しかし、第二類、第四類の助動詞類については、助動詞類として扱うべきかどうか、議論の分かれるところと認識している。これらの分類の必要性和妥当性、他の文法範疇との整合性は、今後実験によっても検証していかなければならない。

<参考文献>

1. 塚脇幸代. 日本語の機能語の範疇と境界, 言語処理学会第14回年次大会. PB2-8. 2008年3月.
2. 塚脇幸代. 対訳コーパスにおける品詞タグ~名詞属性を持つ日本語品詞~, 言語処理学会第13回年次大会. PD1-2. 2007年3月.
3. 塚脇幸代. 対訳コーパスのためのタグ体系, 言語処理学会第11回年次大会. P3-1. 2005年3月.